2017 年度点検・評価シート

※下記の指摘事項、課題を踏まえて、Ⅱ点検・評価　Ⅲ【達成目標】欄を記述してください。

（進捗状況を【現状説明】に記述し、必要に応じて新たに【目標】を設定する。）

2016 年度大学評価（認証評価）結果指摘事項 **＜概評＞** 「学生による授業評価アンケート」の回答は学習成果を測定する指標として十分とはいえないが、「卒業生アンケート」の学習成果に関する設問は指標としては適切であるといえる 学習成果の指標の開発については、ポートフォリオ、ルーブリック等の開発が必要であり、「全学教務委員会」においてその制度設計を行うとしているので、今後の検討に期待したい。
2016 年度外部評価委員会指摘事項 なし
前年度からの課題（2016 年度点検・評価シート Ⅳ次年度への課題 より転記） 社会科学系科目の学習成果の測定指標を開発する。ルーブリックの作成が当面の目標となるはずである。

Ⅰ　評価項目・担当部局

対象部局	国際関係学部
評価基準 4	教育内容・方法・成果
中項目　4-4	成果【自己評定　B　】
点検・評価項目(1)	4-4-1 教育目標に沿った成果が上がっているか。
評価の視点	学生の学習成果を測定するための評価指標の開発とその適用
点検・評価項目(2)	4-4-2 学位授与（卒業・修了認定）は適切に行われているか。
評価の視点	学位授与基準、学位授与手続きの適切性

Ⅱ　点検・評価　対象期間は 2016 年 4 月～2017 年 5 月までとする。（教員数、学生数などのデータの基準日は 2017 年 5 月 1 日）

【点検・評価項目ごとの現状説明】

4-4-1	学生の学習成果を測定するための国際関係学部独自の体系的な評価体制は整備されていない。 2016 年度の学生による授業評価アンケートでは、「Q17.この授業をとおして、自分にとって新しい考え方や発想が身につきましたか。」「Q18.この授業で扱われた分野への関心が高まりましたか。」「Q19.この授業をとおして、自分で調べ、考える姿勢が身につきましたか。」「Q20.この授業を総合的にみて、満足できましたか。」の 4 つの設問で、「非常にそう思う」「そう思う」の肯定的な自己評価をしたのは、全学年平均で、Q17.が 64.1%、Q18.が 69.9%、Q19.が 59.6%、Q20.が 73.2%である（B4-4-1、B4-4-29 d2-表 25～表 28）。 その他、学習成果を測定する参考資料として、次のものがある。 言語文化講座の英語選択者に TOEIC を受検させ（12 月実施）、以後の継続的な受検を英語学習の成果指標として推奨している。中国語、コリア語をはじめ検定試験のあるアジア地域言語の学習者には、検定受検を言語学習の成果指標として推奨している。TOEIC による単位認定申請は 4 件、韓国語検定では 12 件、中国語検定では 24 件となっている。 アジア諸国での現地研修（選択科目）の参加率は、地域言語学習への意欲を測る指標となっている（2015 年度は 48.7%、2016 年度は 54.9%）(B4-4-12)。長期留学者（半年以上）数は、地域言語や地域研究の学習成果を測る補助的な指標となっている（B4-4-29 d2-表 15）。必修科目の卒業論文が、アジア理解の深まりをはじめ、4 年間の学習成果を確認するためのもっとも有益な指標となっている。教務委員会が「卒業論文に関する調査」により「外国語資料を活用した卒業論文の数」を把握し、アジア理解教育の成果をみる一つの参考資料としている。2016 年度は、提出論文 192 本中、外国語を活用した論文の数は 29 本、15%であった(B4-4-13)。 また、2016 年度の 2 年から 3 年へ進級率は 94.9%（国際関係学科・国際文化学科とも 32 単位以上の進級要件を設定している）、卒業率は 88.6%、卒業者の就職決定率は 97.5%(就職希望者に対する就職者の比率)、卒業生に対する就職者比率は 85.0%である（B4-4-29 d2-表 11、表 13、表 14）。すでに高い水準を維持している状況であり、大きな改善は見込めないが、全般的に前年度比を上回る傾向に変化はない。 「社会科学系科目の学習成果を測る指標や方法についての調査」の 2016 年度評価は「C」であるが、以下の事情により、2017 年度目標には設定していない。すなわち、2019 年度にカリキュラム改訂が予定されており、2018 年度中にはカリキュラム・アセスメント・ポリシーの全面的な見直しを行うことになっている。その過程において、ディプロマポリシーに基づく、社会科学に限定されない成果測定方法を総合的に検討したいと考えているからである。
4-4-1	**以下の評価の視点について、新たな取組の有無、または、継続している取組の成果の有無を【　】内に○・×で記入し、○の場合はその内容と結果を記述してください。** 学生の学習成果を測定するための評価指標の開発とその適用について【×】

	具体的事例：
4-4-2	学則（卒業要件）の定めにより、国際関係学科も国際文化学科も、4 年間の修業年限を満たし、所定の 124 単位を修得した者に卒業が認定される。卒業要件は『国際関係学部ガイドブック』の中で明示しているほか、毎年度当初のガイダンス時に持参させて説明し周知に努めている(A4-4-7 p.17、B4-4-27)。上記の要件に基づいて、学部教授会における卒業判定を経て、学位授与は厳格かつ適切に行われている。
4-4-2	**以下の評価の視点について、新たな取組の有無、または、継続している取組の成果の有無を【　】内に○・×で記入し、○の場合はその内容と結果を記述してください。** 学位授与基準、学位授与手続きの適切性について【×】 具体的事例：

【効果が上がっている事項】

4-4-1	
4-4-2	

【改善すべき事項】

4-4-1	・コンピテンシーの評価方法について検討する。 ・社会、人文科学系科目の学修成果を測定する必要がある。 ・言語文化講座科目の学修成果を測定する必要がある。
4-4-2	現地語資料を活用して卒業論文を作成する学生を増やしていく必要がある。

Ⅲ　【達成目標】目標の進捗状況は、「S：完全に達成」　「A：概ね達成」　「B：やや不十分」　「C：不十分」　で、評価する。

達成目標		目標達成の指標となるもの	評価 2014	2015	2016	2017	2018
中期目標(2014～2018)	4-4-1　就職率の向上	学部の就職率 90%			A	A	
	4-4-1　学生が自己の到達目標を定め、そのための計画的な学びや活動を促す環境がある。	キャリア講演会の開催（2 回）			A	A	
		学部独自の「授業改善アンケート」の設問（新設）で、「明確な進路意識（到達目標）をもって学習している」2 年次以上の学生の割合が、70%以上					
	4-4-1　「質保証」の観点から社会科学系科目の学習成果を測定するための制度設計を行なう。	社会科学系科目の学習成果を測定する指標が開発されている。			C	C	
	4-4-2　卒業論文作成において現地語資料を活用できるようになる。	現地語資料を活用した卒業論文の数 30 本			B	B	
16 年度目標	4-4-1　就職率の向上	学部の就職率 87%			A		
	4-4-1　学生が自己の到達目標を定め、そのための計画的な学びや活動を促す環境を整備する。	TOEIC やアジア言語検定による単位認定制度の申請件数：10 件以上			B		
		現地研修、留学（長期・短期）、「インターンシップ・イン・アジアⅠ・Ⅱ」への参加者数：100 名以上			A		
	4-4-1　「質保証」の観点から社会科学系科目の学習成果の測定に向けた準備を進める。	社会科学系科目の学習成果を測る指標や方法についての調査を行なう。			C		
	4-4-2　卒業論文作成において現地語資料を活用できるようになる。	現地語資料を活用した卒業論文の数 25 本			B		
17 年度目標	4-4-1　就職率の向上	就職決定率：85%以上 コンピテンシーの評価方法が検討されている。				A	
	4-4-1　学生が自己の到達目標を定め、そのための計画的な学びや活	TOEIC やアジア言語検定による単位認定制度の申請件数：10 件以上				B	

	動を促す環境を整備する。	留学、「インターンシップ・イン・アジアⅠ・Ⅱ」（現地研修以外）への参加者数：20 名以上					B	
	4-4-1 「質保証」の観点から人文・社会科学系科目の学習成果の測定に向けた準備を進める。	教務委員会において人文、社会科学系科目の学習成果を測る指標や方法（ルーブリックなど）、そして、教務委員会や地域言語、英語の両言語教育委員会において言語文化講座の学修成果を図る方法が検討されている。					C	
	4-4-2 卒業論文作成において現地語資料を活用できるようになる。	現地語資料を活用した卒業論文の数：30%以上					B	

Ⅳ 評価専門委員会所見

全体としての所見

教育の質担保に向けた具体的な動きがどの学部よりも明確に出ており、非常に高く評価できます。改善すべき点も明確に示していることも良いと思います。

４－４－１【現状】

検定受験を言語学習の成果指標として推奨し、かつ外国語による論文執筆等、高く評価できます。さらに卒業者の就職決定率の高さからも取組の努力の跡が窺えます。ただし学習成果を測定するための評価指標の開発とその適用について、可及的に速やかな実施が望まれます。

【目標】

多少 B や C 評価があるとはいえ、比較的高度でかつ具体的な目標を明示して動いている点は高く評価できます。今後は時間をかけつつも社会科学系の科目の学習成果を測定する指標の開発を期待します。

Ⅴ 所見への対応

４－４－１【現状】の所見に「学習成果を測定するための評価指標の開発とその適用について、可及的に速やかな実施が望まれます」と記されているが、まったくもってその通りであり、学部の教育改革の最大のテーマとなっている。現在、学部改組検討委員会において、3 つのポリシーの見直しを行うと同時に、ディプロマポリシーに明記された学修成果をどのように測定するかを規定する「カリキュラム・アセスメント・ポリシー」の策定が進行中である。

Ⅵ 次年度への課題

学部の専門教育の学修成果を測定するための指標について、内部質保証委員会で検討し、教務委員会、教授会に提案する。

本項目の根拠資料（データ類、裏付けとなる資料）

A4-4-1 大東文化大学学則 ≪既出≫A1-1
A4-4-2 大東文化大学学位規則
A4-4-7 国際関係学部 ガイドブック 平成 28（2016）年度入学生用 ≪既出≫A1-12
B4-4-1 学生による授業評価アンケートと大学教育 2015 年度 ≪既出≫B3-12
B4-4-2 FD 報告書 卒業生アンケート 2016 年度 ≪既出≫B4-3-27
B4-4-3 学生生活調査（アンケート） ≪既出≫B1-7
B4-4-12 国際関係学部 現地研修参加率
B4-4-13 卒業論文に関する調査(依頼・回答)（国際関係学部）
B4-4-21 授業評価結果に対する教員コメントの抜粋（授業改善の例として）
B4-4-22 大学 HP ニュース 「ダブルディグリー・プログラム第一期生卒業」
http://www.daito.ac.jp/news/details_10853.html
B4-4-27 2016 年度ガイダンス日程表（学部・研究科）
B4-4-29 大学データ集 ≪既出≫B1-22

〔追加資料〕

国際関係学部ホームページ 「卒業論文ライブラリー」
http://www.daito.ac.jp/education/international_relations/news/details_11546.html
卒業論文数（現地語）
http://www.daito.ac.jp/education/international_relations/news/details_21754.html